

## 新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

### 不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

#### 【取組1】(A中学校)

地域の小学生(特に高学年)やその保護者を対象に、中学校の活動を見学し、交流を深める取組を、学校と保護者の会が連携して開催した。各学級の授業公開に加えて、部活動体験や保護者主催のブースの体験ができるようにした。部活動に入っている生徒は、部活動体験を担当し、部活動に入っていない生徒は、保護者ブースを担当し、生徒一人一人が活躍できるよう配慮した。生徒一人一人の役割を分担し、学年や部活動を越えて協力して、小学生やその保護者を出迎えたことで、学校への所属意識等を育むことができた。

#### 【取組2】(B中学校)

全校生徒が参加することができる地域と連携した取組として、パンの商品開発を生徒会主導で実施した。学校と地域が連携・協働し、生徒の学びの充実に向けて、生徒にとって身近である商業施設に協力を依頼し、商品販売に関する課題解決を行った。特に、パンの新商品の開発では生徒が多様な大人と共に学び、課題解決や地域づくりに取り組める契機となった。生徒会主体の学校行事として、全校生徒に企画の機会が設けられており、認められる場があり、社会性を育むきっかけともなった。



#### 【取組2】(C中学校)

生徒指導の実践上の視点のうち「自己決定の場の提供」について、少人数授業ではあるが、全体での意思表示が困難な生徒がいること、様々な人間関係があること、問題を解くペースにばらつきがあること等を考慮して、英語の授業では適宜ペアワークを取り入れた。その結果、安心して授業が受けられる環境が作られ、生徒が自己表現できるようになった。

#### 【取組3】(D中学校)

全教職員を対象に、「不登校」をテーマに、SCによる校内研修(30分)を実施した。その後、不登校対応巡回教員の仕事内容の再周知と不登校理解についての研修を実施した。これらの取組により、教職員が不登校生徒への対応についての理解を深めることができた。研修後、担任から不登校生徒へ声を掛けて、不登校対応巡回教員の勤務日に校内別室を利用できるようになった生徒もいた。

## 多様な学びの場を確保する取組

### 〔「早期支援」及び「長期化への対応」の取組〕の推進

#### 支援会議（B中学校）

生活指導主任、登校支援コーディネーター、特別支援教育コーディネーター、不登校対応巡回教員等で毎週実施し、管理職に報告している。不登校の生徒の情報の共有や対応方法の協議等を行い、早期支援につなげた。また、欠席が続く生徒、不登校が長期化している生徒等の状況に応じた支援について検討した。

#### アウトリーチによる支援（A中学校）

各担任が定期的に家庭訪問を実施し、生徒本人や保護者と面会して状況を把握した。また、家庭訪問が難しい場合は、オンラインで面談したり、事前に保護者に連絡をして、担任や不登校対応巡回教員からの手紙を同封した配布物を郵便受けに投函したりして、学校とのつながりを感じられるように支援した。

#### 校内別室における支援（E中学校）

校内別室を利用する不登校の生徒に対し、技術・家庭科の学習課題の作成を支援した。登校支援コーディネーターが、ミシンなどの器具を確認し、巡回教員等が安全面を配慮しながら、学習を見守り、支援した。

完成することで達成感が得られ、自己肯定感を高めることができ、学習への意欲が高めることになって、登校日数の増加につながった。



#### デジタル機器を活用した支援（B中学校）

中学校2年生の数学の授業で、教員自作の動画を各々一人1台端末で視聴して理解を深める形の授業を展開した。どこにいても教室で授業を受ける生徒と同様の学習を行うことができた。帰宅後の復習としても視聴が可能で、学習面の不安による登校しぶりの生徒の学習が深まり、不登校生徒の不安感が減った。

#### 関係機関との連携（C中学校）

登校支援コーディネーター、または副校長が子ども家庭支援センター、保健所及び病院等と適宜情報共有し、支援会議等で今後の方針を検討した。また登校支援コーディネーターや不登校対応巡回教員は、在籍生徒が通室する教育支援センターの情報（生徒の通室状況等）を把握して、支援会議で共有した。

## 成 果

校内別室で教科指導や体験活動等を実施したことで、不登校対応巡回教員の巡回日に校内別室登校ができるようになったり、登校日数が増加したりするなどの成果が見られた。

## 課 題

登校支援コーディネーターとの打ち合わせや情報共有を密に行う必要があり、更なる連携の強化を図っていく。